

学校文化「掃除」をとおしてかんがえる

－これからの日本語教員養成のあり方－

土屋千尋（帝京大学）

chihirot<@>main.teikyo-u.ac.jp

1. 本稿の目的

現在、日本国内の学校教育現場では、外国につながる子どもが増加しているのにもかかわらず、学習指導要領もなく、教育・支援において、対応のおくれや当事者まかせの現状がみられる。この現状をかえていくために、学校の教員・管理職が中心となって、子どもの保護者・外部支援者・地域の人々、そして行政と連携をとって子どもの教育にあたっていくべきであるとかんがえる。また、子どもの保護者、特に、結婚移住女性に対する教育と社会的統合も重要な課題である。

これらのことを実践できる教員になるために、教職をめざす学生には、①外国につながる子どもの教育制度のあり方を検討でき、その構築や改革について考察できること、それにくわえて、②自分自身の学習観・教育観を内省でき、変容しようとする力をもつこと、がのぞまれる。①と②の基盤の上に学習言語教育のスキルを身につけなければならない。さもなければ、身につけても意味がないと筆者はかんがえる。いや、それどころか、身につけることも困難であろうと懸念される。

以上のことをふまえ、本稿では、①について、外国人住民と子どもの教育の概況をのべ、その上で、②の自己の変容をどのように可能にさせていくか、日本語教員養成課程の授業での実践とその考察をのべる。

2. 日本にすむ外国人住民

この項では、まず、子どもの保護者である外国人住民の概況について説明する。

2-1. 外国人登録者数

日本国内の外国人登録者数は2009年末現在、2,186,121人、総人口にしめる割合は1.71%、これまで増加の一途をたどっていたが、はじめて前年より31,305人減少となった。この要因となったのは、2008年末のリーマンショックでブラジル、ペルーなど南米の日系人が帰国したためである。一方、中国やフィリピンは前年度より増加しており、国籍別でみるとトップ5は中国、韓国・朝鮮、ブラジル、フィリピン、ペルーで前年度とおなじである。男女別でみると、男1,005,479人 女1,180,642人で、女性の方がおおく、減少数も女性の方がすくないのが特徴的である。

2-2. 外国人住民の居住の仕方と在留資格

居住の仕方は、外国人集住地域と外国人散在地域にわかれる。外国人集住地域は、東海地方や北関東におおく、ブラジル、ペルーなど日系人が集合住宅等にかたまっすんでいる。彼らは自動車関連等製造業に従事する工場労働者である。これに対して、東北地域等おおくの地方では、総人口にしめる外国人の割合はたかくなく、点在している。国籍別でみると、中国、フィリピンがおおく日系人は

すくない。結婚移住女性、技能実習生や技術研修生がおおく、彼らが中心となって地場産業など3Kとよばれる労働のにない手になっていることがかんがえられる。以上の地域は集住地域に対して外国人散在地域とよばれる。

結婚移住女性は、子どもの保護者となるわけだが、彼らの在留資格は日本人との結婚によってえられるものであり、結婚が破綻すれば、その在留資格はうしなわれるわけで、不安定な要素をかかえているといつてよいであろう。

一方、日系人は、1990年の「入国管理及び難民認定法」(＝入管法)の施行により、日系人ということで日本人の配偶者等もしくは定住者の在留資格がえられ、安定した在留資格で居住してきた。この在留資格をえることにより、就労も可能となったのである。しかし、その雇用形態は派遣や請負による非正規雇用であり、彼らは景気の動向に常に左右され、労働の調整弁としてずっと「便利」にあつかわれてきた。とりわけ2008年リーマンショックで非正規労働者の大量の首きりがおこなわれ、日系人社会も大量の失業者をだした。この対応策として、日本政府は、2009年5月、帰国支援金をだし、それをえて帰国したら、3年間はこれまでの在留資格での入国はみとめない事を発表した。これは、「日系人＝安定した在留資格をもっている」とはいえなくなったことを意味するとかんがえられる。入管法施行から20年たった現在、日系人の中には、日本定住を決心した者もいる。それにもかかわらず、帰国するか、帰国するにしても支援金をうけとるか否か、日本にのこって職さがしをするか、苦渋の決断をせまられた。日系人は家族づれで来日することがおおく、この状況の中で、子どももその犠牲になっていることをわすれてはいけない。

2-3. 外国人の日本語学習

2-2であげられた結婚移住女性や日系人の日本語教育については、中国帰国者、難民、技術研修生とことなって、政府の施策による言語教育の保障がない。全国各地で、ボランティアが中心となって、彼らを対象にして日本語教室を開催している。それらの教室活動に対しては、一部自治体の助成があるだけである。このことは、同様に結婚移住女性や外国人労働者が増加している韓国・台湾とくらべて、おこなっている点である。また、子どもの教育に関しては、外国人には就学の義務がなく、学齢期にあるにもかかわらず、日本の公立学校にも、外国人学校にもいっていない不就学の子どもがいることが真に憂慮すべき問題である。その一方で、日本国は、すべての子どもは教育の権利を有するとうたっている「子どもの権利条約」や「国際人権規約」を批准しており、教育制度に不備が生じている。

3. 日本語指導が必要な外国人児童生徒

2008年9月の文部科学省の調査によると、全国公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は28,575人で前年度比12.5%の増加となっている。実際に教育を受けているものは、84.9%と、とりこぼしもある。さらに、注目すべきは、全国在籍人数別学校数である。一校の在籍者数5人未満の学校が8割ちかくをしめる一方、30人以上の学校の割合は約2%にすぎない。しかし、両者とも増加していることから、散在と集中の二極化がすすんでいることがわかる。

2-2でのべた外国人集住地域では、外国人児童生徒数が日本人児童生徒数をうまわっている学校もあり、そのようなところでは、世間の耳目もそそがれ、行政も人員配置など体制をととのえつつある。

ところが、散在地域では、外国人の子どもの教育に関して、集住地域にくらべ、学校にとって明確な課題となつてたちはだかるということがないので、対応のおくれがみられる。子どもも教育・支援

をする大人も散在しており、(1)行政の施策がたてられにくい (2)子どもの問題・支援の問題が表面化しにくい (3)教育・支援にかかわる大人のネットワークがきずかれにくく、教育・支援は個人の努力にゆだねられる傾向にある、というような問題をかかえている。くわえて、東北地方など散在地域で、日本語指導が必要な子どものおおくが、「連れ子」(母親の来日前の婚姻関係で生まれた子で、本国の親戚等にあずけられて成長し、数年後によびよせられた子)であるという特徴がある。「連れ子」の場合、来日が小学校高学年から中学生という思春期のむずかしい頃にあたっている子どももおおく、あたらしい家族の中で、母子関係を再構築しなければならない。保護者である母親もことばや文化のちがいがから家庭内で孤立しているケースもめだち、教育の主導権をにぎれないものもいる。くわえて地域においても孤立している。このことから、学校教員は、保護者への理解もふかめ、教育にとりこむことが重要であることがいえる。

4. 「異文化コミュニケーション」のある日の授業から

この項では、目的でのべた学生の自己変容のために、日本語教員養成課程科目である「異文化コミュニケーション」の授業で、どのようなところみを実践しているか、紹介して、その意義を論じたいとおもう。

4-1. 授業の進行の仕方

「異文化コミュニケーション」の授業では、あるテーマをとりあげて、ディスカッションをする。その形式は、グループ討論、ロールプレイ、ディベートなどである。また、とりあげるテーマは、「日本文化」「若者文化」などというように、何かおおきなカテゴリーに分類し、特徴づけしたものではない。日常の何気ない日々の生活の中でもしだしていく「ちいさな文化」についてである。毎回授業終了後、学生はディスカッションをふりかえり、考察したことや感想を、WebCTの課題箱に送信する。WebCT=Web Course Tools とは、ネットワーク上で教育環境を提供するシステムのことであり、授業を履修している学生だけが教材閲覧や課題提出等ができる。授業担当者である筆者は、毎週課題箱をひらいて、各学生の課題をチェックし、一人ひとりにコメントを返信する。同時に、各自の授業のふりかえりを筆者がまとめて、翌週の授業で紹介し、クラス全員で共有する。なお、授業履修者は60〜70名程度である。

4-2. 「掃除」についてはなしあい

この日の授業では、ある団地の集会所で、ブラジル人児童の学習支援をしているボランティア教室で実際にあった話をとりあげ、提示した。

ある日、みんなで教室の掃除をした。子どもたちはご褒美にシールをもらった。シールがたまると、パーティができることになっている。すると、翌日、ある子どもの父親(ブラジル人)が教室にやってきた。何か、はなしたそうだ。

まず、4人ずつのグループをつくり、グループ内で父親は何をはなしにきたのか、はなしあいをさせた。「褒美をあたえないと、家で掃除をしなくなってしまう」、「シールをためさせて、どんなパーティをひらこうと計画しているのか」、「多分ブラジルでは教室の掃除を子どもにさせないのだろう」など、はなしあいの結果が報告された。

実際のブラジル人の父親は「どうして、教室を子どもに掃除させるのか?掃除の人の仕事をうばっ

てしまうことになる」というようなことをはなしにきた。このことを学生につたえてから、グループの男女2人がブラジル人保護者（夫婦）役、のこりの2人は日本人ボランティア役になって、2対2で、はなしあいの場面を演じるように指示をした。

授業終了後、「ブラジル人保護者役・日本人ボランティア役を演じてはなしあいをした時の気持ちと感想」を課題にだした。

日本の学校における「掃除」は当然のことであり、教育の一環でもある。自分たちが使用した教室を集団で掃除をすることで、自律性・社会性・協調性を育成するというりっぱな名目もある。ほとんどのボランティア役がブラジル人保護者役に対して説得、説教に終始したことが WebCT の回答からもうかがえる。そして、はなしあいをするのを、筆者が指示したのにもかかわらず、学生は、相手を如何にときふせるか、反撃するか、「かち」「まけ」に焦点がいったようである。同時に、「学校などでは、子どもは掃除をしない」という日本とは正反対のブラジルの学校文化をして、カルチャーショックをうけ、ブラジル人保護者役を演じた学生もボランティア役を演じた学生も、ブラジルと日本の学校文化の板ばさみになって、やりにくくおもしろい、なやみもおおきかったようである。中には、ブラジルの文化と反することを子どもにおこなわせたと、あやまるボランティア役もいた。

4-2-1. ボランティア役からの WebCT 回答

以下、学生の実際の回答をゴシック体でしめす。ほとんどのボランティア役は、

- ・ **なぜ、ブラジル人の親はこんな理不尽なことをいうのか**
と感じたようだ。

- ・ **自分達が使った所は掃除をするのが当たり前**
- ・ **一人だけ特別扱いすることはできない。それはまわりの規律をみだすことになる**
- ・ **掃除をする人を雇うお金はないので、皆で平等にやる**
- ・ **他国でくらすことになったら、その国の習慣を理解し、馴染むべきであろう**

しかし、そうはいうものの、

- ・ **ブラジルの文化はちがう。一体どうしたらいいんだろう**
といろいろなやんだ。そして、でてきたことばは、

- ・ **ここは日本なんだから、日本の文化に従うべき**
というものであった。

4-2-2. ブラジル人保護者役からの WebCT 回答

ボランティア役から、「ここは日本なんだから、日本の文化に従うべき」といわれて、ブラジル人保護者役も、

- ・ **確かに日本で生活しているのだからブラジルの常識を押し通すのはどうかなと思う**
と、感じている。しかし、その一方で、説教や説得をされつづけて、

- ・ **自分たちの文化を受け入れてくれず悲しい**
- ・ **責められているようでつらい**
- ・ **差別されているようで、嫌な感じがした**
- ・ **もっとわかり合って仲良くしたいのに、そういう雰囲気にはならず不満である**

という、マイナスの感情をもった。また、

- ・ **子どもが自分と異なる文化で生活をおくっていることを知り、複雑な心境になった**
というのもあった。

4-2-3. 役を演じての気づき

日本の学校文化とブラジルの学校文化のぶつかりあいを演じた自分をふりかえって、以下のような気づきをえた学生もいた。

- ・ 自分の対応は、ブラジル人の親の気持ちをばっさり切り捨てるようなやり方だった
- ・ 途中から、ブラジル人の親の気持ちを知らうと聞き役に徹したら、相手にもこちらの話を聞いてもらえるようになった
- ・ 片言の日本語で親役を演じてみて、親は流暢に日本語を話せないのではないかと気づいた。その上、文化の差という二重のハンディがある
- ・ ブラジル人のお父さんの想いや言動を考えることで、ブラジル人のお父さんに少しでも近づけたような気がした
- ・ 自分の留学時代をふりかえり、当時は相手の国に合わせるしかないと思っていた。グループワークを通して、もう少し自分の文化を主張してもよかったのかなと思った

4-3. 「はなしあい」の再検討

以上、学生からの回答を授業でしめし、ふりかえりを共有した。

さて、この「掃除」についてのテーマは、セメスターの後半にあつかうので、学生は「異文化接触」について、自分の「あたり前」がかならずしも他人の「あたり前」ではないという経験を徐々に積みあげてきている状況にある。しかしながら、

- ・ 頭では理解できても実際に生活に取り入れるには抵抗がある。この問題は解決できないとして、どちらかがおれるしか方法はないとかがえるものがおおくいた。他に方法はないのか、ここで、「ブラジル人の父親と日本人ボランティアの接点、つまり共通点をみいだせないか？」という問いかけを学生にした。その際、以下の WebCT 回答を提示した。
- ・ 小学生の時、母が一度だけ先生に、私の問題について、意見を言いに行ったことがある。母の行動が嬉しく、頼もしかった。この父親の行動は子どもへの愛情ゆえのものかもしれない
- ・ 今小学生だから、掃除ではなく勉強しましょう。今、日本にいますが、ブラジルの原則を守りたいです。たとえ、日本人から見たら誤りであっても、堅持したいです。それは私はこの子の親だからです

ブラジル人の父親もボランティアも、双方とも、子どものことをおもい、よりよい成長をねがっている、それが共通点だとかがえられる。これを出発点として、また別のはなしあいの方向をみいだせないのであろうか。筆者は、学生に、はなしあいの再考をさせた。

また、ここで重要なことは、「掃除」についてのかんがえかたのちがいが、この父親が教室に直接はなしにきてくれたからこそ、わかったということである。一方、ブラジル人の父親も日本の学校文化の特徴をすることができたのである。

ジョン・ポール・デラック(2010)は、「紛争解決 (conflict resolution) はいたみとしての出来事と問題を終結させることであり、そこでとどまってしまう。我々がめざすべきは紛争変革 (conflict transformation) であり、実質的な変化である」ということをのべている。そして、「衝突は人間関係において普通のことであり、それは変化への動力となる」としている。学生が「理不尽」とした父親の行動は、双方の変化のきっかけをつくったといえるのではないだろうか。

5. 発想の転換から自己の変容へ

5-1. 最初に知識を導入しない

学校清掃についてのべた文献（高橋・シャロン 1996）によると、「学校清掃の形態は①掃除員型…欧米諸国に多い ②基本的には掃除員型だが、机の整頓、黒板拭き、花壇の手入れは生徒型…旧社会主義国に多い ③生徒型…アジア・アフリカ諸国に多い」となっている。「①では掃除は奴隷の行う卑しい仕事というギリシャ・ローマ文化の影響があり、③では掃除は修行の大切な要素とする仏教思想の影響が考えられる」と考察している。WebCT の回答にもあったように、「掃除をする人を雇うお金はない」といったように、文献には、掃除を生徒がすることで、「日本は教育水準の高い割には、公教育費が諸外国に比して低い理由の一因になっている」とかかれている。

時折、学生の中には、上記のような文献的知識をあらかじめ覚えてから、その上で、はなしあいへのぞみたいとするものもある。相手との対立をさげたい、円滑にきれいにまとめたいという要望をもっているからであろう。しかし、それでは、意味がない。「掃除」の文化のちがいはよく知られており、文献でも容易にさがせるが、学校文化のこまかなちがいは、当事者にとってはあまりにも「あたり前」すぎて、実際にそのことに遭遇してからでないといけないことの方がおおい。文化のちがいを知識としてしろうとすることより、そのちがいがからの衝突になった場合に、真剣にとりくむその過程にこそおおきな意義があるとおもわれる。まずは、おもいきった発想の転換が必要である。

5-2. 「異文化コミュニケーション」の授業がめざすもの

以上から、この授業がめざすものはいかのようにまとめられる。

- ・グループワークをとおして「ひと」からまなぶ
- ・自分自身をしる
- ・異文化の衝突は、自分が帰属しているグループ内において、「自己」と「他者」との間にも生じることをしる

また、現実の社会においては、移住者とうけいれ側ホスト社会の人々が、対等な立場で、意見をのべあうことをしなければならない。先入観、自分の「あたり前」からの脱却のむずかしさをしり、相互理解がうまくすすまないもどかしさを体験してこそ、対等の立場というものを実感できるのではないかとかんがえる。それは、いきつもどりつ螺旋状にすすんでいくものであるとおもわれる。

将来的に外国につながる子どもをおしえる立場になる学生の自己の変容をうながすため、筆者は、上記のような実践をかさねていっている。そして、教員養成にあたる担当者自身がまず自己の変容につとめなければならないことを最後にしるしておきたい。

参考文献

- ジョン・ポール・レデラック（2010）『敵対から共生へー平和づくりの実践ガイド』東京ミッション研究所
- 高橋正夫・シャロン S. バイパエ（1996）『「ガイジン」生徒がやって来た』大修館書店
- 土屋千尋（2004）『人間関係トレーニングの導入による汎用的な日本語教員養成プログラムの実践的研究』H13-15 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）研究成果報告書 研究代表者土屋千尋